

文法項目データベース「はごろも」の海外における利用可能性をさぐる 一口頭能力評価と読解教材分析から

堀 恵子

東洋大学・筑波大学

キーワード：日本語教育 レベル分け コーパス 主観判定 「学習項目分析システム」

1. はじめに

文法項目データベース「はごろも」は、正しくは「日本語文法項目用例文データベース『はごろも』」（以下、「はごろも」）と言い、主に日本語教育の教師支援を目的として、文法項目の用例文を、話し言葉と書き言葉の複数のコーパスから抽出し、web上で公開しようとするシステムである。

これまで日本語教育で扱われている文法の選択は日本語学に依拠してきた（野田 2005）と指摘され、見直しを迫られている。また、教えるべき文法項目として旧日本語能力試験の出題基準（以下、「旧出題基準」）が参考にされてきた。しかし、複数のコーパス調査の結果、「旧出題基準」の項目には低頻度の項目があると指摘されている（江田・小西 2008, 堀他 2009, 砂川他 2011 他）。

そのため、学習者のコミュニケーションを支える文法項目として、旧出題基準に代わるリストが望まれる。またそれらの項目に関して、教育現場の教師が文法項目の意味用法、機能、難易度、使用される表現形態などについてよく理解し、指導に当たっていくことが求められる。そのためには、実際の用例を通してこれらを知ることが必要である。しかし、特に海外にいる日本語教師にとっては、豊富な用例に接することは必ずしもたやすいとは限らず、web上で見ることができれば有益である。

そこで、「はごろも」ではweb上で文法項目の用例を検索して見ることができるシステムを開発しようとしている。本稿では、システムの概要、研究の進捗状況に加えて、文法項目に付与した6段階レベル分け主観判定と、今後の文法表の海外における利用可能性について述べる。

2. 「はごろも」の概要

2.1. 研究の進捗

2010年4月から科研費の助成を受けて、3名のメンバー（研究代表者：堀恵子、江田すみれ、李在鎬）で開始した。用例を抽出するコーパスを選定し、収集した。また、文法表の作成を開始し、2011年8月には、階層構造を持つ「はごろも」文法表 ver.1.0（大見出し797項目）を作成した。その後、初級から超級までより網羅的に項目を取り入れ、階層構造のない文法表 ver.2（1,884項目）を作成した。

2012年4月には、6段階レベル分けを主観判定によって行い、文解析システム「学習項目分析システム」を公開している。このシステムでは、テキストから文法項目候補を抽出して、レベルとともに示したり、レベルごとの頻度を集計したりできる。

2.2. システムの概要

「はごろも」は図1に示すように、複数のコーパスから、形態素解析に基づく下処理を行っ

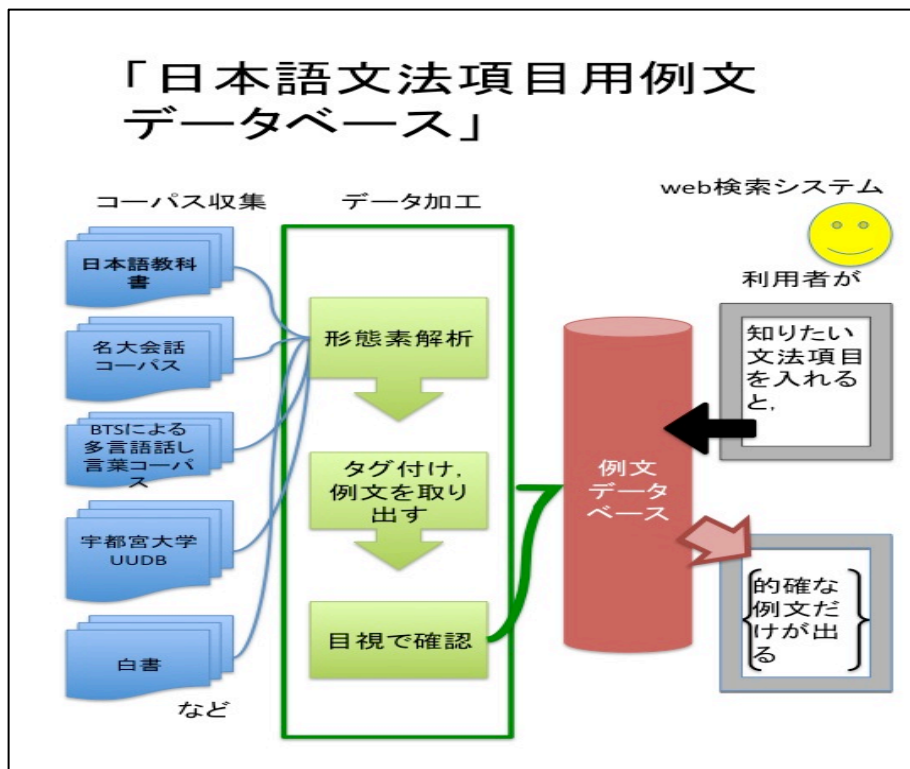


図1 「日本語文法項目用例文データベース」のイメージ図

た上、文字列と品詞情報を組み合わせて用例の候補を抽出する。それを目視で精査して、用例文データベースを作成する。そしてweb上の検索システムによって提供するようにする。

2.3. 「はごろも」文法表

文法項目には、「はごろも」文法表 ver.1.0 では下記の文献から主に2つ以上の文献に採用されているものを採用することとし、文型、複合辞を中心に大見出し797項目を選んだ。

- a. 「旧出題基準」：初級から上級までの項目を網羅し、多くの教育現場、研究で参照されてきた
- b. 『日本語文型辞典(以下、文型辞典)』：多くの文型、複合辞などを見出し語として意味用法を解説している
- c. 『現代語の助詞・助動詞(以下、助詞・助動詞)』：助詞、助動詞を扱っている
- d. 『日本語表現文型(以下、表現文型)』『現代語複合辞用例集(以下、複合辞)』：複合辞を扱っている

2012年3月の「はごろも」文法表 ver.2 では、文法項目の検索のしやすさを考慮して階層構造を廃し、「旧出題基準」の動詞、形容詞の活用形や、上級、超級の項目として『文型辞典』にある文型、複合辞などを加え、1,884項目とした。

項目には、「たとえ～ても」・「～うが、まいが」など、複数の離れている形式からなる文型、複合辞を含む。表1は、参考文献と「はごろも」文法表の共通項目数を示す。

表1 参考文献と「はごろも」文法表との共通項目数(堀、李、砂川、今井、江田 2012より)

参考文献	旧出題基準	文型辞典	助詞・助動詞	表現文型	複合辞
共通項目数	881	1,468	425	549	350

2.4. 文法項目の意味用法, 機能

1つの形式に複数の意味・用法, 機能も取り上げる。例えば, 「ている」は, 旧出題基準では, 「動作の継続」と「結果の状態」だけが取り上げられていた。「はごろも」文法表では先行研究を参考に, 下記の6つを取り上げることにした。

- 動作作用の継続 「私は今本をよんでいます。」
- 結果の状態 「まどがしまっています。」
- 繰り返しの行為 「ここでは, 過去に何度も事故が起こっている」
- 経験 「彼は1ヶ月前に会社を辞めている」
- 恒常的な状態 「道が曲がっている」
- 完了 「子供が大学に入るころには, 父親はもう定年退職しているだろう」

2.5. 利用するコーパス

本システムが利用するコーパスは, 下記の9点である。

(1)書き言葉

「日英新聞記事対応付けデータ (JENAAD)」

「ブログデータ (京都大学・NTT による)」京都大学情報学研究科--NTT コミュニケーション科学基礎研究所 共同研究ユニットによる <http://nlp.kuee.kyoto-u.ac.jp/kuntt/> (以下, ブログ)

「白書」

「CASTEL/J CD-ROM V1.5」日本語教育支援システム研究会 (以下, CASTEL/J)

「日本語教科書」

(2)話し言葉

「日本語会話データベース」平成8-10年度文部省科学研究費補助特定領域研究「人文科学とコンピュータ」公募研究(「日本語会話データベースの構築と談話分析」研究代表者 上村隆一)の成果による (以下, 「上村コーパス」)

「宇都宮大学 パラ言語情報研究向け音声対話データベース (UADB)」

「名大会話コーパス」科学研究費基盤研究(B)(2)「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究」(平成13年度~15年度、研究代表者:大曾美恵子)

「BTSによる多言語話し言葉日本語会話1」宇佐美まゆみ監修(2005)『BTSによる多言語話し言葉コーパス-日本語会話1』東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプロジェクト「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」(以下, BTS)

3. 文解析システム「学習項目分析システム」の公開

2012年5月より, 文解析システム「学習項目分析システム」を公開している。

(<http://130.158.168.228/Checker/Default.aspx>)

図2がテキスト入力画面, 図3は解析結果の出力画面である。結果は文法項目と語彙項目に分けて出力され, 集計もできる(図4)。また, 解析結果はCSVとHTMLの2通りの方法で保存できる。

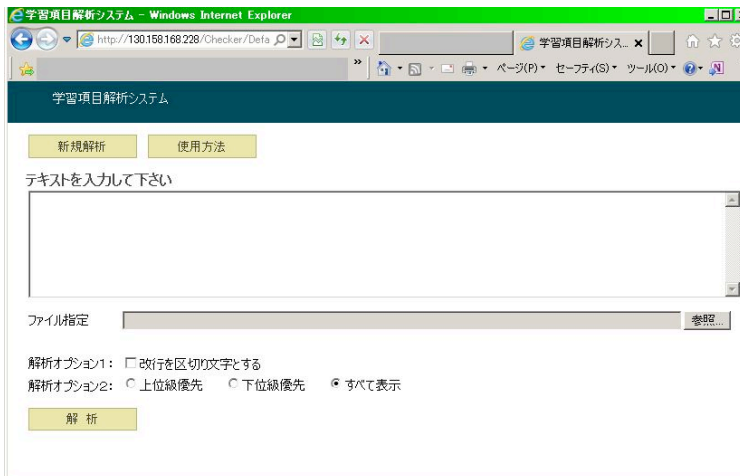


図2 テキスト入力画面



図3 解析結果出力画面

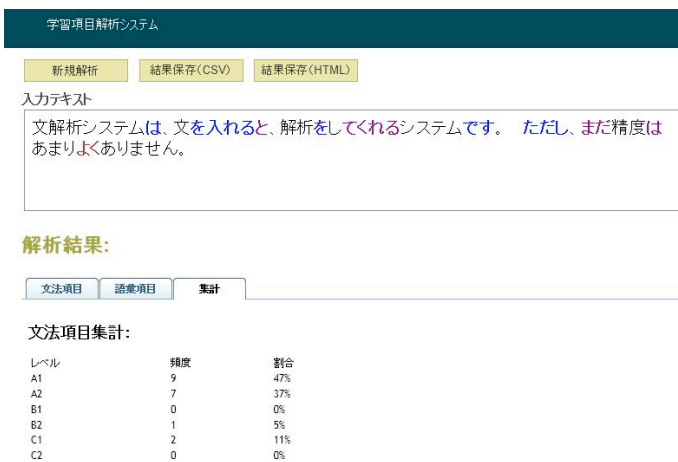


図4 文法項目集計画面

4. 6段階レベル分け

4.1. 主観判定

文法項目のリストがあっても、難易度が分からなければ、学習のどの段階で教えればよいかわからない。そこで「はごろも」文法表の項目に、レベル分けを行った。CEFRの6段階を参考に6段階とし、「初級、初中級、中級、中上級、上級、超級」として、主観判定を行った。

調査協力者：日本語教師7名

判定方法：文法項目とその機能，例文を明示し，その他の情報は示さないブラインド方式。

表2のように，数値を記入させた。

表2 6段階レベル分け 主観判定

調査時に用いた数値	6段階
1	超級
2	上級
3	中上級
4	中級
5	初中級
6	初級

調査結果：評定の一致度を示す κ 統計量は，5名の評定者の間で0.53となり，中程度の一致が見られた。そこで5名の評定を採用し，その平均値をもって6段階レベルづけを行った。

表3 文解析システムにおける6段階レベル分け記号

文解析システムで用いている記号	6段階
C2	超級
C1	上級
B2	中上級
B1	中級
A2	初中級
A1	初級

4.2. レベル分け結果

その結果，レベルごとの項目数は表4の通り，「旧出題基準」とのクロス集計表は表5の通りとなった。

表4 6段階ごとの項目数

レベル	項目数	レベル	項目数	レベル	項目数
A1 初級	155	B1 中級	351	C1 上級	523
A2 初中級	196	B2 中上級	592	C2 超級	67

表5 6段階ごとの項目数

「はごろも」6段階	旧出題基準				新しい項目	総計
	4	3	2	1		
A1	127	6			22	155
A2	54	59			83	196
B1	4	85	67		195	351
B2		5	243	18	326	592
C1		1	82	119	321	523
C2			3	23	41	67
総計	185	156	395	160	988	1,884

表5を見ると、旧出題基準と「はごろも」文法表のレベル分けはある程度一致しているようであるが、1つの級が複数のレベルに分けられており、主観判定を行った日本語教師の文法項目に対する意識が読み取れる。

旧4級であっても、A2(初中級)のレベルと判定された項目には、「Aくありません」「Aくありませんでした」「Aくて」「Vないで～V」「しか」「とき」などがあり、これらは初級では難しく、より高いレベルで導入されるべきであると判断されたと言える。

同様に、旧3級でB1(中級)とされた85項目の内、約30項目は敬語の類で、「～いたす」「Vていらっしやる」「Vておる」「お～する」などがある。その他の項目には、「Aがる/Vたがる」「ず/ずに」「て(も)かまわない」「ようだ」などがある。旧出題基準の3級には敬語の類が約56項目¹入っているが、それらのうち1/2以上はより高いレベルでよいと判断されたことになる。

さらに、B2には旧3級の「おいでくださる」「みえる」などが入っており、さらに高いレベルの項目と判定されている。

逆に、旧2級項目でB1と判定された項目には、「として」「において」「にかんして」「にくらべて」「にたいし」「について」「によって」のような複合辞が含まれ、より早い段階で指導、習得されるべきであると判断されたと言える。

4.3. 6段階レベル名称

主観判定によって得られた6段階レベルには、現在A1からC2の記号を用いている(「学習項目分析システム」)が、CEFRの記号と同じため、今後は再考する必要がある。

5. コーパス調査から見えてきたこと

「はごろも」では、2.5. に示したコーパスから用例文を抽出している。その作業の中で見えてきたことを2つ挙げる。

5.1. 旧3級項目の低頻度項目

これまで、旧出題基準の1級項目には、使用頻度の低い項目があることが指摘されている(堀ほか2009a, 堀2009b, 砂川他2011他)。それだけでなく、3級項目にも低頻度の項目があることが明らかになってきた。これまで江田・小西(2008)では、旧4級、旧3級の項目について、①『男性のことば・職場編』②『新潮文庫の100冊』から5作品、③CASTEL/J所蔵の5冊の

¹ 項目数は、数え方によって多少異なる。

新書の3種類を対象に調査し、低頻度の項目があることを指摘している。

今回、江田(2012)は、旧3級の項目について、「はごろも」の3種のコーパス²を調査し、1万語あたりの使用頻度が0.1以下の項目が、CASTEL/Jの新書76項目(49.4%)、ブログ41項目(26.6%)、BTS75項目(48.7%)であったと指摘している。三者に共通の低頻度項目は、下記の通りである。

◎ 敬語

おVになる・おVください・Nなさる・
Vてくださる・おっしゃる・ごらんになる・
ご存じだ・申し上げる・伺う・おVいたす・
ごVいたす・Nいたす

◎ 相手の領域に踏み込む表現(鈴木睦1997)

Vてもかまわない・Vてはいけない・
なくてはいけない

◎ その他

イAjがる・Vたがる
あげる(初級)・やる
つもりだ・はずがない・Vてばかりいる・Vさせられる
Vたまま・Vまでに(初級)・間に・
VるよりVるほうが

このように低頻度の項目があることについて、江田(2012)は、小西が指摘している「代替項目の存在」のほか、「そもそも頻度の低い項目」があることを指摘する。初級段階で導入される項目は、頻度情報を踏まえた上で、学習者がその段階で「何かを表現したいときにその形式を使わなければ言えない」項目であるかを十分に吟味すべきである。「はごろも」文法表の頻度情報はまだ今後の作業を待たなければならないが、これらに貢献することを期待する。

6. 海外での利用可能性

6.1. 口頭能力評価における利用可能性

CEFRの基準に基づいて口頭産出能力を評価するテストに「CEFR 準拠 Oral Japanese Assessment Europe 日本語口頭産出能力評価法」(以下、OJAE)がある。OJAEでは、CEFRの能力記述文に基づいて「話し言葉の質的側面」を定義しており、口頭能力を評価するルーブリック³(評価基準)となっている(OJAE 2010)。評価基準には「正確さ」の項目があり、文法構造についての記述はたとえば、B1では「予測可能な状況で、よく使われる構文や『決まり文句』を比較的正しく使える」とされている。どの段階でどのような構文が使えるかを判断するためには文法項目に難易度レベルが付与されている必要がある。そこで、「はごろも」文法表の6段階レベル分けが、コミュニケーションの正確さの側面の判断に貢献できる可能性を探ってみる。

² CASTEL/Jの新書部分104.8万語、ブログ10.4万語、BTS日本人同士の会話89.8万語

³ ルーブリックとは、能力を評価基準に従って、レベルごとに記述したもの。(伊東ほか 2004より、筆者がまとめた)

OJAE は 2010 年に開発されて、これまでに基準となる会話 DVD が作成されているが、受験者データは限られており、学習者レベルと「はごろも」文法表の項目を直接比較することがまだできない。

現在判定のなされた口頭能力試験データには、ACTFL OPI に基づく KY コーパスが公開されている。さらに、母語話者データとして、OPI と同じ形式で行われた上村コーパスがあり、母語話者と学習者を比較することができる。そこで今回は、学習者データとして KY コーパス、母語話者データとして上村コーパスの文法項目の使用と、「はごろも」文法表のレベルを比較し、公開されている OJAE データを参考のために挙げる。それらの比較から、「はごろも」文法表が文法能力の判断に貢献できる可能性があるか考察する。

日本語条件表現には複数の形式があり、単独であるいは他の形式と結びついた複合辞として仮定、条件、前置きなどの意味を表す。そのうち、バは「はごろも」文法表では下記のものなどを取り上げている。KY コーパスと上村コーパスのバとバを含む複合辞の使用数、1 万語あたりの使用数を表 7 に示す。

表 6 「はごろも」文法表のバとバを含む複合辞の例

見出し	意味用法	旧出題基準	レベル	例文
ば	条件	3	A2	時間があれば、行きます。
ば+問いかけ	条件(仮定条件)		A2	この病気は手術をすれば治りますか。
ば+未実現のことがら	条件(仮定条件)		A2	もし天気が悪ければ、試合は中止になるかもしれない。
ば	くり返し・習慣		B1	父は私の顔を見れば「勉強しろ」と言う。
ば+意志・希望	条件(仮定条件)		B1	安ければ買うつもりです。
ば～た/～ていた	条件(反事実条件)		B1	もっと早く来れば間に合った。
ば～だろう	条件(反事実条件)		B1	地震の起こるのがあと1時間遅ければ被害はずっと大きかっただろう。
からいえば	立場	2	B2	民主主義の原則から言えば、あのやり方は手続きの点で問題がある。
からすれば	根拠	2	B2	このデータからすれば、少子化問題がすぐに解決できるとは言えない。
からみれば	根拠	2	B2	この記録から見れば、当時の人々が事件に関心を持っていたことは明らかだ。
さえ～ば	必要最低条件	2	B2	息子は暇さえあればゲームをしている。
ば	勧誘・勧め		B2	ほしかったら買えば？
ば	立場・観点		B2	50年前と比べれば、日本人もずいぶん背が高くなったと言える。
ば	前置き		B2	もし、お差し支えなければ、ご住所とお名前をお聞かせください。
ば+働きかけ	条件(仮定条件)		B2	そう思いたければ勝手に思え。
ば～ところだ(った)	条件(反事実条件)		B2	もう少し若ければ、私が自分で行くところだ。
ば～のだが	条件(反事実条件)		B2	お金があれば買ったのだが。(お金がなかったので買えなかった。)
ば～のに	条件(反事実条件)		B2	宿題がなければ夏休みはもっと楽しいのに。(残念なことに宿題がある。)
ば～はずだ	条件(反事実条件)		B2	気をつけていれば、あんな事故は起きなかったはずだ。
ば～ほど	～に比例して	2	B2	食べれば食べるほど太る。
～も～ば～も～	並立	2	C1	歌も歌えば、ダンスも上手だ

表7 KYコーパスと上村コーパスのバ及びバを含む複合辞の使用数と1万語あたりの使用数(堀2012より)

OPIレベル	誤用	A2	B1	B2	C1	正用合計	コーパス語数
IL 以下	0	0	0	0	0	0	51,860
IM	2	7	8	0	0	15	45,558
IH	0	1	5	4	0	10	28,162
A	2	4	9	6	1	20	45,344
AH	28	13	37	33	3	86	86,008
AH1 万語あたり	3.3	1.5	4.3	3.8	0.3	10.0	
S	1	19	18	21	2	60	74,672
S1 万語あたり	0.1	2.5	2.4	2.8	0.3	8.0	
総計	33	44	77	64	6	191	331,604
母語話者	0	21	20	16	0	57	50,988
1 万語あたり	0	4.2	4	3.2	0	11.4	

表8 OJAE 受験者データのバ及びバを含む表現の使用数(ボヒネック山田 2012 より)

被験者のレベル	ば+未実現のこと がら	バ(条件)	例えば(例示)
	A2	A2	A2
B1			1
B2			3
B2			2
C2	1		1
C2			1

表7から、OPIデータによると、中級中にA2レベルの項目から出現が見られ、B1→B2→C1項目へと、学習者レベルが高くなるにしたがって使用が広がっているのが分かる。ここから、バ及びバを含む複合辞の使用に関しては、6段階レベル分けは学習者の習得段階に沿ったものであると推測できる。

学習者の使用数に注目すると、上級上では、母語話者とあまり変わらない使用数が見られる。ただし、誤用も多く出現している。超級では、やや使用数が減るものの、誤用もほとんどみられなくなる。したがって、全体的に見ると学習者の使用頻度は、中級中から出現し、難易度の高い項目へと使用が広がること、上級上で頻度が高く、超級では誤用が減り、正用率が母語話者と同程度に高まることが分かる。

このように、「はごろも」文法項目のレベル分けが学習者の習得段階に沿ったものであるばあい、6段階レベル分けが妥当なものであると判断することができるであろう。これは口頭表現に関するデータのみであり、文章表現に関しても同様に外的基準の付与された学習者データ

と照らし合わせる必要がある。今後各文法項目に対して、同様に調査することで項目のレベル分けの検証ができるのではないかと考える。

表 8 の OJAE 受験者データはデータ数が少ないため何かを推測することができないが、今後学習者データを増やすことで CEFR 準拠のレベル判定を付与された学習者データが増えていけば、それらによっても項目のレベル分けが妥当かどうかを検証できる。

このようにして 6 段階レベル分けの妥当性が検証できれば、将来は逆に、文法項目の使用実態から習得段階が不明な学習者のレベル判定の材料の 1 つとして使用できる可能性がでてくる。引き続き、文法表を評価の材料として使用できる可能性を探っていきたいと考える。

6.2. 中国における教科書調査から

母(2012)によると、中国の教科書は、『日本語専攻学生基礎段階教学大綱』(中国教育部制定)(以下、『大綱』)に沿って作成されているが、「はごろも」文法項目は初級項目の 86% を含み、中級項目の 74.7% を含む。図 5 に示すように、『大綱』の初級項目のうち、半数以上が B1 以上の項目である。また、図 6 は、『大綱』の中級項目にしめる「はごろも」のレベル分けであるが、25% は C1 以上のものである。

図 5 『大綱』の初級項目に含まれる「はごろも」文法項目レベル(母 2012 より)

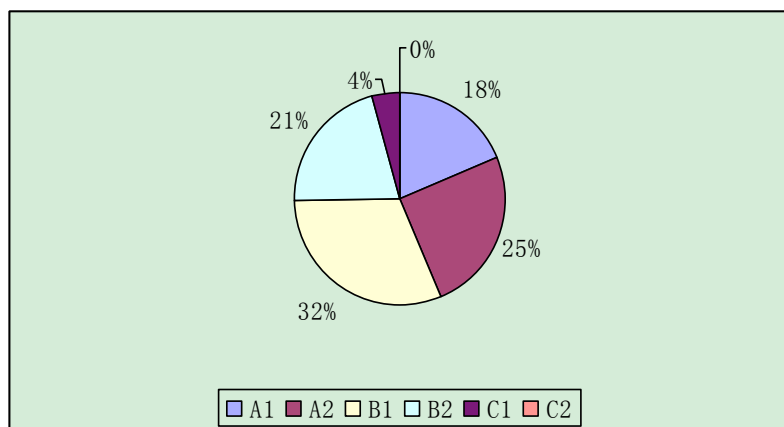
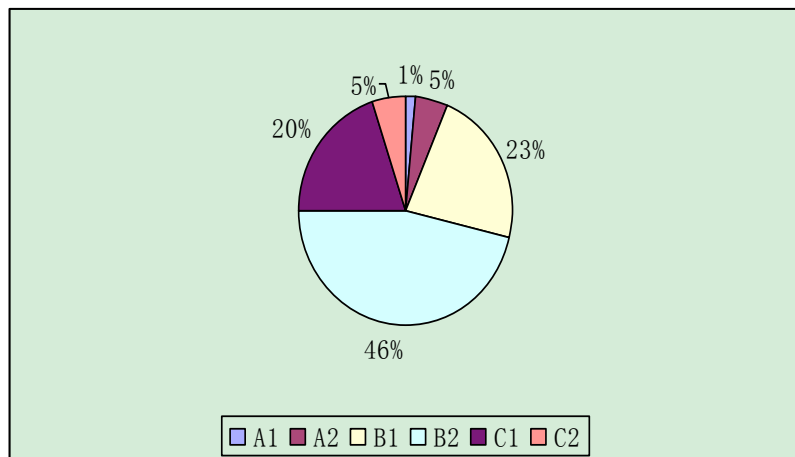
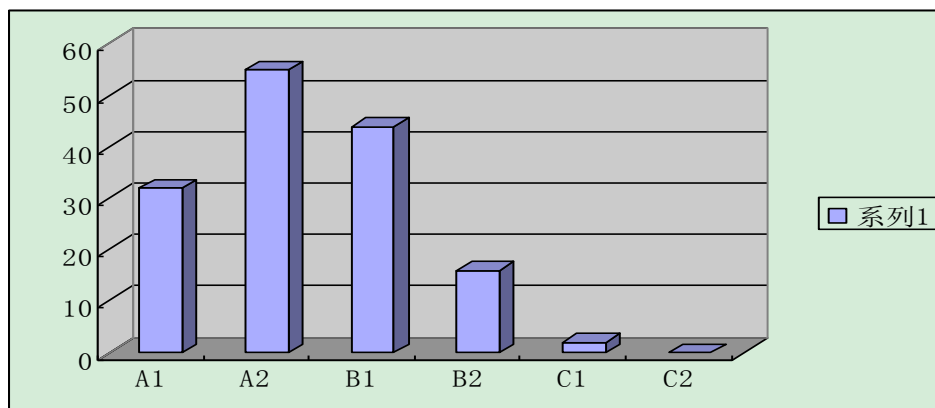


図 6 『大綱』の中級項目に含まれる「はごろも」文法項目レベル



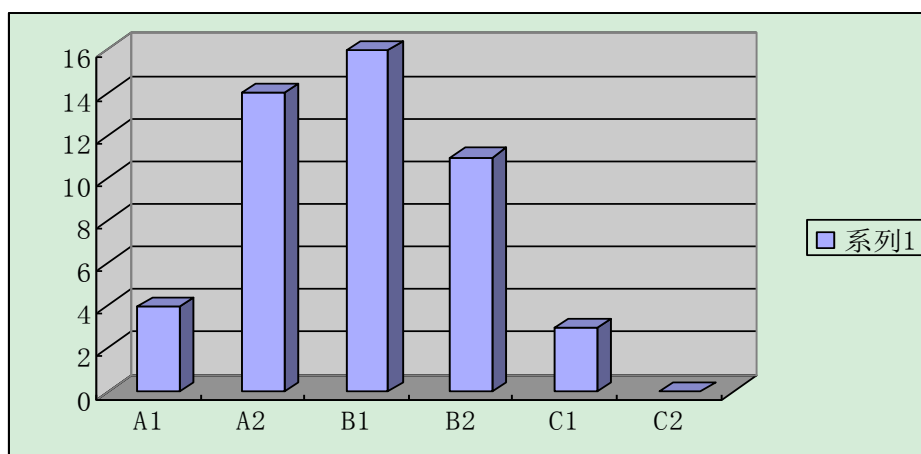
さらに、中国の教科書を調査し、『総合日語』（第1、2冊）というよく使用される教科書には「はごろも」の文法項目は149項目（84.66%）が使用され、レベル別割合は図7に示すとおりである。A2が最も多く、B1が40%を占めている。ただし、4.2. で示したように、B1の半数は旧出題基準3級項目であり、おそらく旧出題基準を参考に行っていると思われる初級教科書のレベルは、妥当なところであると言えるだろう。

図7 中国の教科書に含まれる「はごろも」文法項目レベル



さらに読解教材についても調査を行い、『総合日語』（第1、2冊）読解部分には、「はごろも」文法項目が48項目（84.21%）含まれており、レベル割合は図8に示すとおりであった。B1は先に述べたように半数が旧出題基準3級項目である。B2以上の項目も20%近く含まれている。母は「高度の文法項目が必要であることが示唆された」と述べている。中国学習者にとって読解は漢字の知識による助けがある分、より高度な教材であっても使用することができるとも言える。

図8 中国の教科書の読解部分に含まれる「はごろも」文法項目レベル



以上のように、「はごろも」文法表のレベルによって教材を見直すことで、難易度を推測できるため、今後他の地域においても、教材、テスト作成などに「はごろも」文法表が使用され

ることを希望する。

7. 今後の課題

本稿では、「はごろも」の概要、進捗状況と主観判定による6段階レベル分けについて説明した。文法項目のコーパスに見られる頻度から、低頻度項目があることが明らかになった。

さらに今後の海外における利用可能性を口頭能力試験のレベル判定の1つの材料とできるかどうか可能性を探ってみた。すでに外的基準が付与されたKYコーパスからは、バとバを含む複合辞に関して、「はごろも」文法表のレベルと学習者の習得段階が矛盾しないことが明らかになった。今後はこのような調査をさらに行い、レベル分けの妥当性を検証していく。さらに将来的には、レベル判定の材料として利用できるよう調査を進めていく。

また、中国で使用されている教科書の調査から、「はごろも」文法表の分布を調べた。中国においてはより高いレベルの項目が使用されていることが明らかになった。

今後他の地域の教科書についても調査を進めていきたい。

以上から、今後の課題は、文法項目の妥当性をコーパスの頻度情報から検証すること、6段階レベル分けの妥当性を多くの外的基準を持つ学習者データから検証することが必要であることが明らかになった。さらに、そしてそれができれば、教材やテスト評価に利用できると期待される。

参考文献

- OJAE(2010)『CEFR 準拠日本語口頭産出能力評価法欧州共通言語参照枠レベル例示:研究報告・基準ビデオ搭載DVD』Berlin: OJAE.
- 伊東祐郎・庄司恵雄・加納千恵子・當作靖彦(2004)『テストと評価』2004年日本語教育国際研究大会ワークショップ セッション5資料
- グループジャマシイ(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 江田すみれ(2012)「中国における『はごろも』の利用可能性」2012年日本語教育国際研究大会パネルセッション「web ツールを通して世界とつながる日本語教育」発表資料
- 江田すみれ・小西まどか(2008)「3種類のコーパスを用いた3級4級文法項目の使用頻度調査」『日本女子大学 紀要 文学部』57
- 国際交流基金・日本国際教育協会(2002)『日本語能力試験出題基準【改訂版】』凡人社
- 国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞-用法と実例-』秀英出版
- 国立国語研究所(2001)『現代語複合辞用例集』国立国語研究所
- 小西円(2008)「実態調査から見た「義務の表現」のバリエーションとその出現傾向」『日本語教育』138号
- 砂川有里子・清水由貴子・奥川育子・千葉庄寿(2011)BCCWJによる機能語データベース(スタンドアロン版)(Ver.0.9.1b)特定領域研究「日本語コーパス」研究成果報告書
- 森田良行・松木正恵(1989)『日本語表現文型』アルク
- 野田尚史編(2005)『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
- 母育新(2012)「中国における『はごろも』の利用可能性」2012年日本語教育国際研究大会パネルセッション「web ツールを通して世界とつながる日本語教育」発表資料

- 山田ボヒネック頼子「OJAE : CEFR ヨーロッパ共通参照枠準拠口頭表現能力評価と文法項目の関連から」2012 年日本語教育国際研究大会パネルセッション「web ツールを通して世界とつながる日本語教育」発表資料
- 堀恵子・荒川みどり・小池恵己子・小林佳代子(2009)「日本語能力試験出題基準の<機能語>を対象としたコーパス調査-目標言語使用領域での課題遂行に必要な項目を検証する-」『2009 年度日本語教育学会春季大会予稿集』,194-199.
- 堀恵子 (2009)「日本語能力試験文法出題基準の機能語を対象としたコーパス調査-表現形態と改まり度の違いに着目して-」2009 年度豪州日本研究大会・日本語教育国際研究大会 (JSAA-ICJLE2009), 電子データ 151.
- 堀恵子 (2010)「日本語教育のためのコーパスに基づく文法項目データベース構築と検索システムの公開をめざして」『世界日本語教育大会 予稿集』
- 堀恵子(2011)「文学・評論等書籍に現れた旧日本語能力試験 1 級文法項目の特徴-コーパス調査結果から-」2011 年度日本語教育国際研究大会 (ICJLE2011) 予稿集『異文化コミュニケーションのための日本語教育』1, 855-856.
- 堀恵子(2012)「日本語文法項目用例文データベース「はごろも」の概要と、利用可能性」2012 年日本語教育国際研究大会パネルセッション「web ツールを通して世界とつながる日本語教育」発表資料
- 堀恵子・李在鎬・砂川有里子・今井新悟・江田すみれ (2012)「文法項目の主観判定による 6 段階レベルづけとその応用」2012 年日本語教育国際研究大会